



第 17 号

編集発行

園田学園女子大学

シニア専修コース

「けやき便り」編集クラブ



消費者から生産者へ

本学名誉教授 山本 恒

農業社会では、すべての人々が畑を耕し農作物を作り、それを食べていました。すなわち、人々は「生産者＝消費者」でした。産業革命以後、生産者と消費者が分業化され、私たち一般の人々は消費者になってしまいました。電化製品を作る人とそれを使う人。農作物を作る人とそれを食べる人。情報についても、私たちはメディアが作ったテレビ番組や新聞などを見る人、すなわち情報を消費する人になってしまっています。現在、情報機器やインターネットなどの普及で、いろいろな情報を容易く得ることができ、まさに大量の情報を消費する消費者になっています。また、他人が作ったゲームやアプリケーションを探し回っています。

アメリカのアルビン・トフラー（1928～2016）が1980年に著者「第三の波」で、農業革命、産業革命に続いて、第三の波すなわち情報革命の波が押し寄せてきていると予言しました。この社会は、工業社会の特徴（分業化、同時化、集中化、巨大化、中央集権化など）を攻撃している波で、非マスプロ化、多様化、分散化、適正規模、分権化などを目指しているとし、「生産者＝消費者」の復活をあげています。今、この第三の波を考えてみると、多くのことが予言通りになりつつあることに驚きます。

この中で、「生産者＝消費者」についてもう少し考えてみましょう。以前は情報を発信したくても、その方法をもたない私たちでしたが、今では少しの技術を修得すればホームページ、ブログ、SNS、電子書籍など誰でも情報の発信者になれます。さらにプログラムの技術を修得すれば、ゲームだって、様々なアプリケーションだって自分で作れます。私たちみんなが、農業社会のときのように生産者にも消費者にもなれるわけです。

「そんなこと言われても、何を発信していいかわからない」と消費者に慣れてしまった多くの方は言われるかも知れません。しかし、このことは情報社会を健全な社会にするために極めて大切なことなのです。一握りの生産者が、情報社会を牛耳ってしまい、ほとんどの消費者がそれに従う社会になっては恐ろしいことがおこります。オバマ元大統領は、「ただ作られたものを消費するだけでなく、自らがコンピュータを使って何かを作り出す能力を身につけてほしい」と子どもたちに呼びかけています。日本でも、次の新しい学習指導要領ではプログラミング教育が小学校から始まります。これを機会に、あなたもどんな生産者になれるか考えてみませんか？

目次

消費者から生産者へ	本学名誉教授 山本 恒	P 1
開花亭にて第22回「七夕まつり」	「けやき便り」編集クラブ	P 3
第54回けやき祭	「けやき便り」編集クラブ	P 4
山に魅せられて50年	国際2年 川村 隆志	P 6
『出雲国風土記』の地に行く	国際2年 河田かつのぶ	P 8
リトルワールド見学バスツアー	研究生 井上 聖明	P10
国際文化学科新入生歓迎会	国際3年 櫻井 秀也	P11
いちご会懇親夏旅(高山)	文歴2年 阿部野英男	P12
文学歴史学科9期生 今年2度目の同期会	研究生 木下 俊造	P14
読者の広場	「けやき便り」編集クラブ	P14
文歴11期生同窓会	研究生 井上 礼子	P15
けやき遊歩クラブ35回例会「奈良 西ノ京を歩く」	研究生 中村米三郎	P16
アメリカ大陸の古代神話について	研究生 馬場 正子	P19
タイ(イーサン)とラオスの旅	研究生 十河 和夫	P21
三喬改メ「七代目笑福亭松喬」襲名披露公演 落語鑑賞記	情報3年 岡田 真人	P25
50年前の旅の記憶	研究生 橋本 秀明	P27
歴史の道「中国街道」を往く	情報3年 藤原多計治	P28
韓流時代劇が面白い	研究生 樽井 敏彦	P29
園田学園女子大学シニア専修コース「クラブ紹介」	「けやき便り」編集クラブ	P30
総合生涯学習センターからのお知らせ	総合生涯学習センター	P34
編集後記	「けやき便り」編集クラブ	P35



開花亭にて第22回「七夕まつり」

主催：生協学生委員会

新年度が始まり、あっという間に前期の授業が残り数回となり、あとは長い夏休みを迎えるという7月7日（金）、園田学園女子大学生協主催の「七夕まつり」が、学生と地域の皆様を招いて開催されました。

心配した雨も降らず最高の条件です。シニア学生として今まで在籍していながら、この催しは無縁のものでしたが、今回「軽音楽同好会」が初参加とのことでシニアの仲間たちが大勢応援に駆け付けました。18時開始、いの一番に出演です。



左から山根、木村、高木、野間、徳田(敬称略)

曲目は井上陽水「夢の中へ」とデル・シャノン「悲しき街角」です。野間淑美さん・木村勲さん・徳田将之さんに新メンバーの高木貞夫さんと山根邦男さんが加わり、日頃の練習成果が表れた雰囲気ある演奏でした！

人生の年輪を感じる5人のハーモニーには味のある深みを感じました。いくつになっても何かを始めるには、遅すぎることはなくまさに良き出会いだどつくづく羨ましく思いました。



その後、学生の「手話部」「チアリーディング部」「軽音楽部」の披露があり、あとカラオケ大会がありました。開花亭には地域の可愛い子供たちがビンゴ大会や輪投げ、スーパーボールすくいを楽しみ、わた菓子やポテトフライ、お好み焼きやかき氷を手にとり浴衣姿の夏祭り風景。



大人も子供も笑顔がいっぱいの開花亭。赤ちゃんを連れた家族もおられたおかげで、平均年齢は我々シニアの年齢を足してもかなり低いと感じられました。

来年の「七夕まつり」には平均年齢をうんと引き上げたいと思いますのでどうぞご参加よろしくお願い申し上げます！

(写真と文：「けやき便り」編集クラブ

平田・宮本・井上)



第54回けやき祭 2017年10月21日(土)のみ開催

今年のけやき祭は、超大型で強い勢力の台風接近中での開催となりました。2日目は前夜の連絡で、安全を第一に考えて一部の野外イベントを開花亭に変更して正午まで開催。午後からは中止となり、残念ながらシニアの出番はなくなりました。

今回はシニアの我々が今までになくこの学園祭に参加し、盛り上げようと意気込んでいただけに、しかも2日目が見どころ聴きどころ満載だったため、すっかり気落ちしてしまいました。

今年のテーマは、『Happiness』です。

来場いただく皆様に喜んでもらえ、学生も楽しめる学園祭にしたい！！という思いが込められているそうです。



1日目、雨中にも負けずに多くの来場者が応援に駆け付けてくださり有り難く思いました。まずは地域連携推進機構のつなガール主催「キッズフェスティバル」が1号館教室で開催され、子供たちがバルーンやおもちゃ作りなどで大喜び。シニア学生たちも分担して応援しました。



また開花亭では総合生涯学習センターの「時代屋」ブースにて、シニア専修コースと公開講座に関する相談コーナーや景品の出るゲーム(ダーツ・海賊船長危機一髪)があり、大人にも子供にも人気がありました。

海賊船長危機一髪ゲーム



ダーツゲーム



「遊歩クラブ」ブースでは、活動内容の紹介や例会記録の小冊子を展示、「ITを楽しむ会」ブースでは、ミニパソコン教室が開かれ「ペイントで印鑑作成」「Wordでお絵かき」「Scrach 鯨くん頑張る」を学ぶことが出来ました。



「遊歩クラブ」例会の思い出に花が咲きます



パソコンでこんなことが出来るとは！！

開花亭で遊んでいると野外ステージでのステージ発表の時間が！ 12時から40分間、「軽音楽同好会（バンド名：GAKU-YOU）」が出演。

ぬかるんだグラウンドに雨が容赦なく降りしきる中、30人余りが親衛隊となって応援します。



昨年4月正式クラブとして発足。メンバーは5名でボーカル1名、ギター3名、ドラム1名の構成。定番曲「夢の中へ」から始まり「500マイル」や「花はどこへ行った」など軽快に演奏していきます。今回はビートルズの「And I love Her」が披露されたのには驚きました。

60年代のフォークソングや吉田拓郎、ビートルズの曲は我々シニアの青春時代をよみがえらせて、つい口ずさんでいる方もいました。40分間で8曲の演奏でしたが、今後ますますの活躍が楽しみです。

そうこうしていると次は開花亭での「朗読倶楽部」のステージ発表です。13時半から30分間、部員12名の初お披露目です。



最初に女性陣が「発声基礎練習」「五十音」「ことばあそび」の分読、続く男性陣は「外郎売（ういろうり）」の分読、そのあと金森さんによる落語小話と「えんぴつびな」の余裕たっぷりの

素晴らしい朗読は、観客の拍手を誘っていました。

「朗読倶楽部」は今年の7月に結成されたばかりで、ほとんどのメンバーが朗読の経験がないなかでのいきなりの発表会だそうです。

今回の発表に際してただ1回の通し稽古をしたただけだと伺い、とてもまとまっていたので企画と構成が素晴らしいと思いました。

また、声を出すことが健康の秘訣とのことですので、これからも元気で新しい演目を披露していただくことを期待しています。



金森さんが素晴らしい朗読を披露

本来なら2日目には「コーラス部」と再び「朗読倶楽部」「軽音楽同好会」の出演が開花亭ステージで行われる予定でしたので、このために練習を重ねてこられたことを思うとせつなく悲しくなります。また次回出演を楽しみにしています。

来年開催されるけやき祭には、もっと多くのシニア学生の方々に訪れていただけるようよろしくお願いいたします。

(写真と文：「けやき便り」編集クラブ

樽井、平田、宮本、井上)

園田シニアのにんげん探求7

山に魅せられて50年

世界の高峰に挑む 川村 隆志さん

国際文化学科2年の川村隆志さんは、山行歴50年。世界の山に挑んでいます。これまで登った山やその情熱をインタビューしました。

昨年はマッターホルンに挑戦しましたね



マッターホルン山頂を望む
川村隆志さん

昨年の夏は、スイスアルプス、マッターホルンに挑戦しました。7月27日に関西空港を出発し、26日にアイガー麓の標高1034メートルの村に到着。次の日は、バスで標高2000メートル

近くまで移動し、ハイキングをして標高2680メートルの山小屋での宿泊です。登山鉄道やロープウェイなどで、標高2000メートルから4100メートルの各地をハイキングや観光をしました。8月1日は、151人乗りの大型ロープウェイでの移動で、フィンデルン氷河を望んだりマッターホルンの絶景を望んだりするハイキングでした。この日はスイス建国記念日で、屋台や花火、音楽で一晩中賑やかでした。

2日からは一緒に行った5人と別れ、一人で



フランス側アルプスの
雪渓に行く

4000メートル級のスイスアルプスを眺めての登山。急斜面の岩場の階段や急なジグザグの上り、片側は崖にガレ場といった登山でした。

マッターホルンは4478メートルですが、4200メートル地点で断念。登頂する人が多く、タイムオーバーでした。帰国したのは8月8日です。

ガンゴトリⅢ峰登頂は日本人初だ

とお聞きしましたが



▲ガンゴトリ登頂を伝える新聞記事

登山歴の中で記憶に残る最大の山が、ガンゴトリⅢ峰です。「ガンジスの源」という意味のインド・ヒマラヤ西部の6577メートルの山で、ドイツ、インドに続いて世界で3登目、日本人初の登頂でした。

この峰にアタックする海外登山隊が発足したのが1990年で、兵庫県勤労者山岳連盟の山岳会から集まった、女性3人と男性6人のメンバーとして参加しました。その間、支援の体制を連盟が整えてくれたんです。

登頂に向けて私たちは、ランニングと筋力アップの日常トレーニング、冬の北アルプス槍ヶ岳での風雪に対するトレーニング、5月の剣岳小窓尾根での岩稜線縦走トレーニング、富士山5合目からランニングで頂上まで駆け上がるなどの高所順応トレーニングを1年間かけてやりましたよ。

1990年9月6日に先発隊が出発して、通関の手配などした後、本隊と合流してデリーで食料や備品を調達した後、ポーターなど総勢50名でベースキャンプに向かったのが17日でした。その後の荷揚げは、吹雪や高度障害で大変でした。ルート工作に数日かけ、ルートの下見とアタックの準備に私も関わりました。

登頂を目指して出発したのが10月2日AM3時45分で、私を含めた隊員3人と、現地のコックであるラックスマンの4人。小雪のチラチラする標高5580メートルのC(キャンプ)1を出発しました。外はととても寒気が厳しく、すぐに手先や足先が冷たくなりましたが、6000メートルのC2まで登りました。

ここから先は未知の世界で、急な雪壁があり、途中にはクレバスが広がっているので慎重に登りました。頂上に続く雪の急な斜面は、2～3歩登るだけでも息が苦しかったですが、11時15分にアタック成功。

記念撮影をし、すぐに下山です。懸垂下降で、あっという間にコル(尾根のピークとピークの間へのこんだ所)まで下れました。そこで小休止の後、固定のロープを張っての下山でした。その頃になると、急に疲れが出てきたのを覚えています。C1に15時過ぎに着いたら仲間が出迎えてくれ、疲れも吹っ飛びましたよ。



▲遠征隊の帰国の出迎え

デリーに戻り、ヒマラヤ自然保護団体に1,500ドル(当時の日本円で22万円)を寄付して、30日間の活動を終えて全員無事帰国。その後、「ヒマラヤの霊峰 登頂に成功 連日雪の悪天候、3人がアタック」などの新聞記事を読み、改めていいチャンスに出会えたと思いました。

「アルペン芦山」で活躍されてきましたね

この山の会は、季節ごとの登山のほか、ロックガーデンなどの清掃や岩登り教室など知識・技術の普及もやっています。

昨年に創立50周年を迎えた歴史のある会で、「芦屋勤労者山の会」としてスタートした後、「アルペン芦山」と改名したんです。創立の頃は、日本人のマナスル初登頂以来の登山ブームが続いていて、あちこちで山岳会が誕生していた時期です。



私は、1985年から10年間、副会長の役を引き受けました。1998年からの6年間と、2011年から5年間、会長を務めました。会長などの役職に就きましたが、「何もしない会長」でした。皆さんがいろいろな特技をいかして動き、支えてくれました。

2010年に、剣岳の北方稜線で濃霧のため道に迷い、2日間ビバーク(露営)し、メンバー8名全員が県警のヘリコプターで救出されたことがあります。このとき私がリーダーで、苦い経験でした。でも、ケガもなく全員が無事に下山できたことは、幸いなことでした。そうした意味で、私の会長時代に大きなケガや死亡事故がなかったことは良かったと思っています。

今後の山との関わりは?

17歳の時に山に魅せられて以来、近年は南米ペルーの山岳地帯へのハイキングや、ベネズエラのテーブルマウンテンへのエコツーリストキャンプなどに仲間と行ってきました。

昨年足を怪我したこともあり、今後は岩にアタックしたいですね。道場の烏帽子岩などをフィールドに、山や岩を楽しみたいと思っていますよ。

(インタビューと文:「けやき便り」編集クラブ

河田 かつのぶ)



松山利夫先生と行く『出雲国』巡りバスツアー

『出雲国風土記』の地を
行く

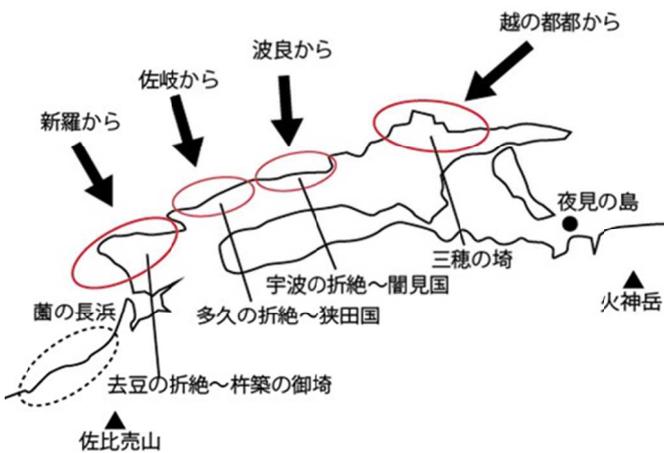
国際文化学科2年 河田 かつのぶ

●授業をもっと広げるフィールドワークを
の音がバスツアーとして実現

松山利夫先生の「日本の風土と文化」の講座は『出雲国風土記』を元にして、日本の風土の原像を探るというものでした。受講者から、『出雲国風土記』に示されている、「国生み伝説」の地である出雲大社などを訪ね、「国造り」や出雲大社の成立などについてフィールドワークをしたいとの声があがりました。松山先生がその声に応えてくださり、「出雲国巡りバスツアー」が14名の参加者と先生の15名で実現しました。

9月21日(木)～22日(金)の一泊二日のツアーの行き先は、出雲大社周辺、境港周辺、松江城周辺、そして宿泊地は玉造温泉です。

1日目、学園を8時に出発した学園のバスは、阪急武庫之荘駅に寄った後、大山を目指しました。



▲<http://yomukiku-mukashi.com/Kunibiki.html>

『出雲国風土記』には、4つの国引きの場面がありますが、最後は能登半島の「越の都都(つう)」から綱で引いてきた、美穂の崎(現在の美保関町あたり)です。その綱をかけた杭が、伯耆の国の火の神岳(現在の大山)で、引いた綱が、夜見の島(弓ヶ浜)だといわれています(上の図参照)。そこで、中国道から米子道を経て国引きの地を

一望できる島根県立夢みなとタワーへ登り、そこから弓ヶ浜、境港周辺、大山を眺めながら、先生の解説で国引きの地を確かめました。



▲水木しげる記念館前

昼食後、水木しげるロードを自由散策して妖怪たちとご対面です。特色の薄い境港の商店街を活性化させるために行政が中心となり、境港出身の水木しげるさんの妖怪たちのモニュメントやオブジェを百体以上展示したのです。キャラクターを使った街おこし、商店街の活性化の成功例として広く知られたロードは、観光地としてすっかり変貌しており、そのことを目の当たりにすることができました。さらなる活性化を目指して、像を移転する工事が進められていました。松山先生の後期の講座「国際観光開発論」とも関わるものだと思えました。

●松江城、小泉八雲の世界に出会い

玉造温泉に向かう

3時から、小泉八雲資料館と八雲の旧居を見学しました。ラフカディオ・ハーンは35歳の頃のアメリカ・ニューオーリンズ万博での日本文化との出会いや英訳された『古事記』との出会いを契機として、1890年来日し、松江で英語教師の職を得、小泉セツと結婚しました。そうした歴史の経過や、小泉八雲の著作の背景、

生活の場である旧居が、展示・公開されていました。そこで、田中眞知子さんの次の感想を紹介いたします。

—— 小泉八雲資料館では、彼の生い立ちや日本にきた経緯を学び、その後旧居を見学。ハーンが気に入っていたという庭を眺めながら、時折吹いてくる風の心地良さに気持ちが癒されたひとときでした。

次に松江城の天守閣に登り、市内を一望して、次の目的地、玉造温泉へ向かいました。途中の車窓から見た夕日の美しさには息をのみました。いにしえの人びとも同じ光景を見て感動していたのでしょうか。——

●古代出雲の地の資源の豊かさや文化の高さ、人びとの精神性を知る

『風土記』にも記されている玉造温泉に17時半に到着し、3回入浴すると美人になるという湯につかり、楽しい会食。全員ミーティングをして就寝タイムは、11時を過ぎていたのでしょうか。



▲稲佐の浜 弁天島にて

2日目は、玉造温泉を8時30分に出発し、稲佐の浜、出雲阿国の墓、出雲大社、県立古代出雲歴史博物館の見学を徒歩で移動しました。その時のことを三木静子さんは、以下のように書いてくれました。

—— 『古事記』の国譲りの舞台であり、旧暦10月に全国の八百万の神を迎えるという稲佐の浜に降り立つ。出雲大社に向かう途中、出雲大社の巫女であり、歌舞伎創始者とされる出雲阿国の墓前に手を合わせました。

出雲大社の一から四の石、木、鉄、銅製の鳥



居をくぐって、縁結びの神である大国主命を祀る本殿に。平成の大遷宮を終え、新たな神気ただよふ本殿を前にし、厳かに二礼四拍手一礼にて参拝をしました。その後、古代歴史博物館に展示されている出雲大社境内出土の直径約3メートルの宇豆柱、高さ48メートルの空中神殿の模型などを見て、かつて巨大な神殿が築かれていたことに驚きと感動を覚えました。

古代出雲の地の資源の豊かさや文化の高さ、人びとの精神性を知り、今もそのアイデンティティーが息づいていることを理解しました。

教室の講義から現地に立って、松山先生の問いかけや解説に思考をめぐらし、ワクワクしながらの五感を通した、生きた学びとなりました。——

●学びを深め、仲間とつながるツアーでした

出雲そばの昼食の後は、すぐ近くの島根ワイナリーでの試飲とお土産タイムでした。19時前には全員元気に尼崎に到着しました。

今回のバスツアーを通して、学びを広げ、深め、目で見たり、街の匂いや雰囲気を感じたりすることができました。また愉快的な仲間と出会い、親交を深めることができたツアーでした。

松山先生の解説があり、玉造温泉一の旅館に宿泊し、学園バスでコースを自由に移動するという三拍子そろった、有意義な二日間でした。





国際文化学科合同研修

リトルワールド見学バスツアー

研究生 井上 聖明

今回の合同研修は、10月6日の課外授業において、JICA・シニアボランティアから鈴木俊章さんを招き「サモアの文化と衣、食、住について」の講演を受けたあと、10月14日に世界の住居などが多く展示してある、愛知県犬山市のリトルワールドを訪ねました。

河合先生はじめ22名の参加者は、学園と武庫之荘駅からバスに乗り込み、車中では「イタリア、アルペロベッコの家」「サモアの料理」などのDVDを見ながら、施設案内パンフレットで気になる展示物とか食事場所の確認など、それぞれに思いを巡らして時間を過ごしました。

到着後、取り敢えず集合写真を撮り、最初に「本館展示場」を見学しました。内部は予想以上に各国の展示物が多く、興味の尽きない感は有りましたが、やむを得ず先を急ぐことになって「屋外施設」に向かいました。



屋外の展示施設は、広い緑の中に「実物大の住居や関連の展示物」が点在しているので、各自興味のあるところを見学し、「ミクロネシア・ポリネシアのエリア」に一旦集合しました。

そこで、河合先生からヤップ島やサモアの住居について説明をしていただき、JICA講演のなかで話された「壁のない家での生活」が理解できました。その後、それぞれの住居をバックに集合写真を撮影して前半が終了。



後半は、すでに昼の時間も過ぎて流石にお腹が空いてきましたので、急ぎレストランエリアに向かい、最初の店（ドイツレストラン）に駆け込みました。関西人らしく？一斉に注文しましたところ、ドイツのお嬢さんは困り果て「並んでくださーい」。

早速、ドイツビール飲み比べセットにソーセージの盛合せで喉と空腹をなだめ、皆さんの顔つきも和やかに・・・ヤレヤレ。



その後は自由行動となり、思い思いのグループに分かれて場内展示施設を巡りながら、出口のお土産店へと最終集合場所を目指すことになりました。

私は、ここでは「ワニの肉」を食べないと値打ちが無いと聞いていたので、アフリカンプラザに急ぎ「ワニ・ラクダ・ダチョウ肉料理とアフリカンビール」を無事にゲット。



再び展示物を見学しつつ出口に向かい、飲み物などを調達してバスに乗車。



帰りの車中でも会話が盛り上がりましたが、予定時間通り降車場所に到着、全員で運転手さんにお礼の拍手をして解散となりました。

今回も、普段は学年を越えてなかなか会話する機会がなかった皆さまとお話できたことでも有意義な一日でした。



6月19日にチャティーで国際文化学科の新入生歓迎会が開催されました。今年の新入生は5名で、そのうち4名の方の参加ということで人数は少なかったのですが、2年生、3年生、研究生、それに松山先生と総合生涯学習センターの大野課長も出席くださり、計41名の参加を得て会場は大いに盛り上がりました。

まずは全員で記念撮影をおこないました。

それから松山先生より、「皆さんの学習意欲は高く、私も勉強させてもらいます」とのをお褒めの言葉を頂戴しました。大野課長からは、「学園イベントにも参加して、情報交換や学生との交流も進めましょう」とのご挨拶。

続いて本日主役の1年生から自己紹介です。

「皆さんの素敵な笑顔に驚きました」「勉強すれば好きな旅行がもっと楽しくなりそう」「入ってみたらたったの5名でショックを受けたが、かえってゼミのようで質問もできてよいです」「大連に長年駐在し、清王朝の歴史に大変興味を持って研究しています」などなど。新しい学校生活と授業が楽しいという気持ちは共通しているようでした。



中村さんの乾杯でいよいよ宴がスタートします。会場は立食仕立てで、都度料理を確保する立食仕立ての会場では、テーブル毎に10名ほどのにぎやかな輪ができ、おまけにテーブルの「はしご」をする人も多く、学年を越えて会話がはずんでいたようです。



宴もたけなわとなったところで、先輩から自己紹介や経験談。「何でも挑戦しよう」「クラブ活動へもぜひ」といった新入生への激励やアドバイスなど、個性豊かな挨拶を次々にいただきました。

こうして、あっという間に楽しい時間が過ぎて、名残り惜しいまま、5時30分をもって、閉会となりました。

この日の歓迎会の司会は2年生のクラス委員の河田さん。軽妙な切り口で会を大いに盛り上げていただきました。2年生幹事の皆さん、ありがとうございました。

追記：そして、有志は松山先生と大野課長を無理やり2次会へお誘いし、楽しい夜は続いたのでした。

いちご会 懇親夏旅 (高山)

文学歴史学科2年 阿部野 英男

高山と楽しい仲間ありがとう

今回の「いちご会懇親夏旅(高山)」のテーマは“古い町並み「高山」散策&飛騨牛を食す&お喋り付き”でした。

それら全てクリアーして更におつりある素晴らしい旅でした。当たり前のことですが、旅は楽しい仲間とお喋りして、美しい景色をみて、美味しい食があれば完璧です。それらが全て経験できた最高の旅でした。

夏休みの8月28日～29日の2日間、いちご会メンバー男性5名、女性2名で高山市に行ってきました。坂田、河村、倉橋、原田、早田、宮岡の各氏と阿部野の計7名です(河崎さんが残念ながら欠席でした)。

尚、“いちご会”とは、文歴2年生19名が一期一会と15期生の縁ということの、懇親を深める会です。

孫の世話達成感の安堵です

夏休みシニアにとって長すぎる

ポロシャツがネクタイ姿頭下げ

さて28日の朝、高山に向かってスタートです。集合は新幹線新大阪駅のホームに出発15分前ですが、皆30分前には集まり、流石シニアの旅と安心しました。そして参加女性からの差し入れオヤツで、思わずニッコリの順調なスタ



ートです。久しぶりの再会で孫の話など近況報告や世間話で、アッという間に名古屋でした。

溪谷と駅弁ビール決まり事

食いしん坊溪谷よりも駅弁か!

名古屋駅では、旅の定番駅弁を買いました。やはり名古屋は味噌カツ弁当です。そして、溪谷美最高の2時間半を「特急ひだ」で楽しみました。車内では、ビール飲む人約5名、早々に弁当をばくつく食いしん坊(因みに阿部野)1名です。



高山は出格子町家酒似合う

一人旅後ろ女の影一つ

高山は古い町並みアイス合う

さあ高山に到着しました。今、高山市は、高山祭の屋台行事が「ユネスコ無形文化遺産」に登録され、駅ビルも綺麗にして、町全体が盛りあがっていました。そして江戸の面影を残す「高山古い町並み」があり、2つの地区が国の重要伝統建造物群保存地区に選定されています。けっこう人出はありましたが、綺麗な古い町並みは散策しやすく、良い観光地に来たな!と感じながら7名揃って歩きました。日本酒の試飲、“さるぼぼ人形”を売っている土産物店、そして飛騨牛の串焼き、それから、ソフトクリームをなめながらの歩きで、観光地旅を楽しみました。

**日本人歴史伝統あらためて
凄いです繊細緻密凄いです**

更に、高山では四百年の歴史がある高山祭の屋台会館を見学しました。八幡祭屋台11台が綺麗に並んでいました。11台が別々の形と由来歴史をもっていて、昔の人たちのすごさに感激しました。隣には、桜山日光館があります。日光東照宮の十分の一で再現した建造物も観る価値大です。



夕食は飛騨牛もどきスイカ付

そして、ホテルに夕刻に入りました。結構歩きましたが皆疲れも見せず、温泉につかり夕食です。料理は、飛騨牛が少しの会席料理を食べました。ここは早々に引き上げ、部屋で2次会を開きました。河崎さんの心付けを足して、ビールとつまみを持ち込んで開始しました。みんなの夏休みの生活話や“ここだけの話”と云っての打ち明け話には、皆大盛り上がりでした。

**孫帰るシニア夫婦何故か笑み
暇ですね早く学校始まれば
言い訳をすればするほど墓穴掘る**

**若いころもてた話は見てはなし
学生の文学少女分かります
学園を盛り上げたくて言ってます
前歴がばれて盛り上げツッコミを
飲まないが一番騒ぐアホな奴**

**朝市は朝食よりも優先す
いじられて喜ぶ顔は南方系
外国人間違う顔で笑いとる**

二日目の朝は、朝飯前にナス、キュウリの野菜や漬物を売っている宮川朝市で買い物です。そして、朝食は和食か洋食のバイキングでした。これは、いろいろな料理が並び、お値打ちでした。ただ、私が入場する時、英語で挨拶され少し慌てました。

押さえます古い町並み飛騨の里

美味い朝食で満足して、高山定番のもう一つ“飛騨の里”の散策です。ここは場所が市内から少し離れていて観光客が少なかったこともあり、散策しながらの場所としてはおススメです。そして、昼食には十割そばと味噌煮込みうどんを食べて、高山の定番観光を押さえました。



文学歴史学科9期生 今年2度目の同期会

研究生 木下 俊造

6月15日の同期会は、吉村先生の講義で紹介していただいた「神戸市立海外移住と文化の交流センター」内の[移住ミュージアム]の見学と、「はたごや本店」でのランチ会でした。

ブラジル移民も当初は1か月半に及ぶ長い航海で、狭い船室と見知らぬ土地や将来への不安などもあって、過酷な旅だったようです。今回の見学では、センターの方の丁寧な説明で、移民は遠い過去の話でないことを理解できたことに感謝しています。それと、協力者にアントニオ猪木氏の名前を見つけた瞬間、なぜか懐かしい感じがしました。

交流センターの建物自体が船をかたどっており、ミュージアムも天井の低い船室そのものの内装で、当時の雰囲気を体験させていただいたのに、入館料フリーで本当にいいのかなと思った次第です。



交流センター入口で

見学を終えた9名は交流センターから生田神社にも立ち寄り、少しおごそかな気分で、ランチ会場に待機の6名と合流し、前回は上回る15名の楽しい仲間たちが勢揃いしました。

ランチ会はいつものように、再会できた喜びや趣味の話等々で盛り上がり、近況報告も参加者だけでなく、今回は不参加の方々の情報も漏れなく交換でき、8年目を迎えた9期生の強いきずなを感じられたのか、早々に次の同期会も12月上旬と決定しましたので、お楽しみに！

読者の広場

楽しい川柳、いかがですか？

<シルバー川柳>

- ・この動悸 昔は恋で 今病気
- ・恋かなと 思っていたら 不整脈
- ・いびきより 静かな方が 気にかかる
- ・医者と妻 急にやさしく なる不安
- ・忘れえぬ 人はいるけど 名を忘れ
- ・土地もある 家もあるけど 居場所なし
- ・起きたけど 寝るまで特に 用はなし
- ・味のある 字とほめられた 手の震え
- ・目覚ましの ベルはまだかと 起きて待つ
- ・厚化粧 笑う亭主は 薄毛症

<還暦川柳>

- ・バラのよう 枯れても妻は トゲを持ち
- ・長生きは したくないねと ジム通い
- ・老いてなお 自立・自立と 励まされ
- ・診断は 昔過労で 今加齢
- ・同じこと 息子が言えば 聞く女房
- ・共白髪 約束違えた 禿げちゃった
- ・神よりも 妻の裁きが なお怖い
- ・忘れずに 書いたメモまで 忘れてる
- ・古女房 年金だけが 赤い糸
- ・同窓会 片思いですみ 大正解

(「けやき便り」編集クラブ)

出典は全国老人福祉施設協議会 別冊宝島他)

文歴11期生同窓会

研究生 井上 礼子

平成27年卒業の我々文歴11期生は卒業3年目を迎える。研究生として専修コースで学び続けられている方と、完全卒業して多方面で活躍されている方が二分され、なかなか会う機会もなく時間が経っていきます。そこで夏休みに楽しい同窓会を、という要望があり、大阪の町を船から見る「なにわ探検クルーズ」に乗船して、大阪の歴史などの説明を受ける、文歴らしい学びの同窓会が8月17日に参加者12名で開催されました。

当日11時過ぎに地下鉄四つ橋線西梅田に集合し、乗船するなんば駅すぐの湊町船着き場へ。1時間半のクルーズですが串カツ・たこ焼き・芋蛸・南瓜・夫婦善哉・おいなりさんなど大阪がいっぱい詰まったお弁当を頂きながら若手落語家の説明を聞きます。今回は桂優々さんが担当で軽妙な語り口に笑いが途切れません。



窓が開閉されたり、日除けにサンバイザーが貸し出されたり、至れり尽くせり・・・見慣れた大阪の建物や橋を説明され、川岸から手を振り返してくれるのは「大阪人」というのも大いに納得！！



いつもの看板を
船に乗って川から
こう見上げると・・・
何だか新鮮！！



下船して桂優々さんと記念写真

下船後、通天閣見学に向かいましたが、アジア観光客の長蛇の列で1時間待ちとのことで断念！ 全員の希望で「かき氷」を食して大満足の同窓会を終えました！ 幹事さん、いろいろと企画から始まって、案内や出欠まとめ、お世話になり有難うございました！

今では文学歴史学科で学んだことさえ記憶の彼方に霞んでおりますが、こうしてご縁あって皆様と元気にどこかに出かけ、笑い合えることが有り難く・・・いつまでも元気で居たいな、と思った暑い熱い夏の思い出の1日でした。



けやき遊歩クラブ 35 回例会 「奈良 西ノ京を歩く」

研究生 中村 米三郎

5月21日(日)新入会員も参加される今年度初めての例会、35回例会「奈良 西ノ京を歩く」を実施しました。当日の天候は、良好でしたがただ暑かったですね。

当日は36名の方が、10時に近鉄橿原線「西ノ京」駅前広場に集合されました。この広場は、薬師寺の一部と思われるほど薬師寺はすぐそばにありました。

集合して頂いて、10時15分から薬師寺で法話を聞く予定があるので、取り敢えず今日の行程を説明して出発です。

1. 薬師寺白鳳伽藍

少し歩いて薬師寺に到着。会計の方から拝観券を受け取り、法話が行われる金堂に直行します。法話は、通常は玄奘縁日(5日)と薬師縁日(8日)に行われますが、10名以上で依頼すれば行ってもらえます。修学旅行生には、薬師寺から旅館に出張してでも行われるそうです。この法話は、僧侶の語り口にユーモアがあり楽しいという評判なので、下見の時にお願いをして聞けることになりました。



金堂の薬師三尊像(薬師如来、日光菩薩、月光菩薩一三尊とも国宝・白鳳時代)が祀られている横で法話が始められました。ユーモアのある語りで話が進みましたが、私が感心したのは、薬師三尊像の説明です。今



流に説明すれば、薬師如来はお医者さん、日光菩薩は日勤の看護師さん、月光菩薩は夜勤の看護師さんという非常に分かりやすい説明です。白鳳時代(大化の改新(645)から平城京遷都までの約60年間)にも夜勤があったのかと面白く思いました。

法話を聞いた後、もう一度皆さんに集合して頂き、毎回恒例としている自己紹介をお願いして、11時30分まで解散。白鳳伽藍を各自で独

自に見学して頂きました。

ところで、薬師寺は、今からおおよそ1300年も昔の白鳳時代、天武天皇が皇后(のちの持統天皇)の病氣平癒を祈り、藤原京で創建されました。その後平城遷都に伴い、養老2年(718)に現在地に移されました。

薬師寺は、金堂、講堂などを中心に、東塔と西塔の2つの三重塔を配する構成は独特なもので、薬師寺式伽藍配置と呼ばれています。この華麗な伽藍も数次の火災にあって次々と焼失し、創建当時の姿を残すのは東塔(解体修理中)のみとなりました。

しかし、昭和42年、高田好胤管主が失われた堂塔の復興を大悲願とされて、写経勧進により、昭和51年金堂が、昭和56年には西塔が、その後中門、回廊、玄奘三蔵院伽藍が復原造営され、平成15年には大講堂も落慶し、今なお白鳳伽藍の復興を目指して再建が進められています。

写経をして、薬師寺に納めれば、法話によると薬師寺はその写経を、金堂や大講堂などに納め、永代供養をされるそうです。参加された会員の中には、写経用紙を購入され、写経をして薬師寺に納められる方もおられました。

11時ごろ、大講堂の方から、鐘の音、読経の音が聞こえてきましたので、大講堂に行きました。大講堂の本尊は弥勒三尊像(重要文化財)で、今日、5月第3日曜日(21日)は、弥勒縁日でその法要でした。10名程度の僧侶が読経をされていて、荘厳な雰囲気がありました。

2. 薬師寺玄奘三蔵院伽藍

11時30分になりましたので、再度集合して頂き、薬師寺のもう一つの伽藍「玄奘三蔵院伽藍」に移動しました。

玄奘三蔵(602~664)は、『西遊記』で有名な中国唐時代の歴史上の僧侶ですが、17年間にわたりインドでの勉強を終え、帰国後は持ち帰られた経典の翻訳に専念、その数は1,335巻に及ぶそうです。



南京に駐屯していた日本軍が土中から玄奘三蔵のご頂骨を発見、その一部が昭和19年に全日本仏教会にも分骨されたそうです。

薬師寺も玄奘三蔵と深い縁のある事から、遺

徳を顕彰するため全日本仏教会より昭和56年にご分骨を拝受し、平成3年玄奘三蔵院伽藍を建立されました。平成12年12月31日に平山郁夫画伯が入魂された、玄奘塔北側にある大唐西域壁画殿にお祈りしてあります。

今回の例会の記念写真を玄奘三蔵院伽藍で撮り、薬師寺から15分程度歩いて、昼食の場所「田舎料理草の戸（くさのえ）」に向かいます。

3. 昼食「草の戸」

12時15分「草の戸」に到着すると、既に36人分の風流弁当が準備されていました。参加者にはご自身が申し込まれた弁当の前に座って頂き昼食です。我々以外に8名のお客様がおられました。入口には「満席」の札がかかっていました。



4. 唐招提寺

13時、「草の戸」を出発して、唐招提寺に向かいます。薬師寺から唐招提寺への道は、崩れかかった土壁が大和らしい雰囲気醸し出している道がありますが、車の往来が多く、今回は人数も多いことから、秋篠川の堤防の上を歩き、15分程で唐招提寺に着きました。

唐招提寺は、南都六宗の一つである律宗の総本山です。開山は鑑真和上で、鑑真は、聖武天皇の願いに応えて、井上靖の名作『天平の甕』にもあるように、多くの苦難の末、来日をはたされ、我が国に戒律を伝えられました。天平宝字3年(759)に戒律を学ぶ人たちのための修行の道場を開かれ「唐律招提」と名付けられました。

鑑真和上の私寺として始まった当初は、講堂や経蔵、宝蔵などがあるだけでしたが、現在では、天平時代建立の金堂、講堂(平城宮より移築)が天平の息吹を伝える、貴重な伽藍となっています。



建物では、金堂、講堂、鼓楼、宝蔵、経蔵がすべて国宝、礼堂、東室、御影堂がすべて重文です。また、仏像では、金堂の盧舎那仏、薬師如来、十一面千手観世音菩薩、梵天、帝釈天、四天王の九尊がすべて国宝、講堂の弥勒如来、持国天、増長天の三尊がすべて重文ですが、お堂の外からお姿を拝観することができました。



特に講堂は平城宮唯一の宮殿建築の遺構だそうです。鑑真和上座像(国宝)は、御影堂に移され6月6日の開山忌の前後3日間しか公開されていません。今はお身代り像が祀ってあり拝観することができます。当時の日本ではだれでも僧侶になれたようで、鑑真和上が来日された目的は、僧侶になるための「戒」を受けるためだそうです。その場所が「戒壇」だそうです。その戒壇を拝観し、最後に鑑真和上御廟にお参りをしました。

5. 垂仁天皇陵

1時間ほど唐招提寺に滞在して、30分ほど歩いて垂仁天皇陵に向かいます。唐招提寺



出発の折に、垂仁天皇陵にまつわる話をさせていただきました。田道間守(たじまもり)の話です。9年間の労苦の末、田道間守が不老不死の果物を持ち帰った時は、天皇はすでに崩御されており、田道間守は悲しみのあまり死んでしまった、といわれています。この不老不死の果物とは、何でしょうか、という話です。誰か、田道間守をご存知ではないでしょうか。

私は、小さいとき、本で読んだか誰かに聞いたか記憶にはないのですが、この話はなぜかよく覚えていました。ところで、不老不死の果物とは何でしょうか。この回答を、会員が「橘」と答えてくれました。

垂仁天皇陵に向かつて14時15分唐招提寺を出発しました。第11代垂仁天皇陵は、周囲を

水濠に囲まれた全長 227mの大型前方後円墳です。この濠の中に田道間守の墓と伝えられる小島がありました。

6. 平城宮跡か帰宅かのグループに

垂仁天皇陵で2グループに分けました。近鉄で「尼ヶ辻駅」から「大和西大寺駅」に行き、そこから平城宮跡（大極殿）に行くグループ、もう一つは平城宮跡（大極殿）に行かず帰宅するグループです。

要するに、当例会は15時頃「尼ヶ辻駅」で解散しました。3人が「尼ヶ辻駅」から電車に乗らずに「大和西大寺駅」まで歩かれました。この3人と平城宮跡グループは、平城宮跡に行く途中で出会いました。

7. 平城宮跡（ツバメのねぐら入り）

平城宮跡大極殿の入館時間は、16時ですので、15時30分頃、「大和西大寺駅」南口を出発しました。

大極殿に行く途中に、朝の集合時、会員から教わった「ツバメのねぐら入り」の場所がありますので、そこで少し時間を取ります。

「ツバメのねぐら入り」とは、私たちの身近な鳥であるツバメは、冬の時期は暖かい南国（台湾やフィリピンなど）で越冬し、春になると繁殖のために日本に戻ってきます。4月頃から民家の軒下などで子育てを始めるツバメ。やがて巣立ったヒナと親ツバメは河川敷のヨシの原などに集まり、集団で夜を過ごす「ねぐら」を形成します。



平城宮跡は、昨年7月末、最大約5万羽が確認されており、平城宮跡は全国的にも大規模な「ねぐら」で知られてい

ます。インターネットによると、ツバメが大極殿南西のヨシの原上空に姿を現し始め、夕焼け雲を背に、瞬間に黒い影は空一面を覆いつくします。飛来したツバメは上空を飛び回り、徐々にその高度を下げながらヨシの原に舞い降りるのです。平城宮跡の「ツバメのねぐら」のヨシの原で休憩をして、この話をして頂きました。

ただ、平城宮跡は非常に広く淋しい場所なので夕方に、個人的に見学するのはリスクがあるかなと思いました。

8. 平城宮跡（大極殿）

和銅3年（710年、奈良時代初期）元明天皇によって、都が飛鳥の藤原京から奈良の平城京に移されました。

その後、8代の天皇74年間、わが国の都として栄えました。平城京は、道が碁盤の目のように整然と並べられ、中央の北に宮殿平城宮が造られました。



築地塀に囲まれた平城内には、天皇の住居の内裏、政治や儀式を行う大極殿や朝堂院、朝集殿などがあり、数千人の役人が働いていたといわれています。

そのうち、東朝集殿は、いまでも唐招提寺の講堂として残っています。大極殿からは、800m先にある壮麗な朱雀門が望め、広大な平城宮跡が一望できます。大極殿内には、天皇が座られる高御座がありました。

9. むすび

薬師寺は、大悲願として白鳳伽藍の失われた堂塔の復興を写経勧進により進められ、創建当時の朱色の華麗な薬師寺を甦らせており、唐招提寺は、天平時代からの建物が多く残り、古色豊かで静かな雰囲気を感じさせます。この動と静という違った雰囲気を持つ両寺を今回の例会で訪ねることができました。

また、田道間守のように歴史の底に沈んでいる人の業績を垣間見ることもできました。

また、朱雀門とともに大極殿が、朱の色も鮮やかに美しく輝く平城宮跡に出会ったのも、良かったと思います。

参加者皆様のご協力とリーダー・会計のご努力により、この例会が無事に終了したことを心からお礼申し上げます。有難うございました。



アメリカ大陸の古代神話について

研究生 馬場 正子

アメリカ大陸は、いわゆるインディオという原住民たちが暮らしていたが、信仰とあいまって伝説・神話が受け継がれてきた。しかし、ポルトガル・スペインを初めとするヨーロッパの侵略でたくさんの原住民が殺され、そのため、神話も殆ど残っていない。かろうじて残る神話を紹介する。

1. マヤ神話



マヤの神殿

マヤ神殿は 91 段×4=364+1段（頂上）で 365 段となり、1 年をあらわす（マヤ暦）。マヤ文明は文字が発達し、石に彫ったり、土器には絵物語を著した。辺境の地に残る「ポポル・ヴフ」の神話は 4 部作である。

第 1 部は宇宙と人類の創生を語り、双子と巨人の戦いを描く。第 2 部は双子の父と叔父が地下の神々に殺され、復讐する物語である。第 3 部は祖先の誕生と太陽の出現・火や作物の起源を語る。第 4 部は首長たちの戦争の記録である。

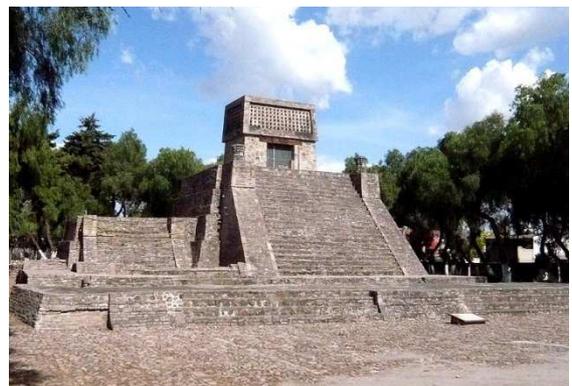


石像

1519 年にスペインが上陸し戦いが始まったが、各地で抵抗が強く、グアテマラ高原（1528 年）、北部ユカタン地方（1528 年）での戦いが記録されている。1562 年スペイン人により、マヤ族の文書が焼き払われた。しかし、密林に逃げた人々は 1697 年まで抵抗したという。

2. アステカ神話

アステカは 1116 年～1325 年の流浪の末、メキシコシティに都テイノチケトラをつくる。15 世紀にテスココ・トラコペンと 3 国同盟を結び、勢力を拡大した。



アステカの神殿

アステカ神話では神も死ぬのが特徴である。何度も太陽の時代が交替する。この 3 国同盟の時代は第 5 の太陽の時代にあたる。火に飛び込み、太陽と神ができたという。

その後、人間が生まれ、トウモロコシなどの作物も現れる。この神話の影響からか、神が犠牲になって世界を作ったのだから、人間も人を犠牲にしなけれ



生贄の儀式。石器のナイフで胸を裂き、心臓を取り出す

ばならないとする**生贄の必要性**を強調する。折に触れ、儀式の時、他部族からつれてきた生贄をピラミットに並べ、心臓を取り出し、皮をはいでいったという。ピラミットの階段は血で染まったという。

また、これは作り話という説もあるが、一の葦の年に、白い顔の黒いひげを生やしたリーダーがあらわれるという言い伝えを残した。

この一の葦の年がちょうどピサロの上陸にあたったため、たった500人の手下をつれた外国人を前に戦意をそがれて敗れたといわれている。また、奴隷にされ、生贄要員にされた他部族の人々がスペイン側についたためともいわれている。こうして、アステカ帝国は戦闘集団にもかかわらず、あっけなく敗れた。



アステカ神話を題材にしたメキシコの国章

* 「一の葦」とは各年に割り当てられた名前の一つで、52年ごとに一巡する。1から13の数字と20の物の組み合わせは各日に割り当てられ、260日で一巡する。ある年の元日が「一の葦」ならその年が「一の葦」になる。

3. インカ帝国の神話



インカ帝国の国旗

三帝国の中で、インカは比較的新しいせい、その生活はよく残っている。食物はジャガイモ（自然のフリーズドライ＝乾燥ポテト）・トウガラシ・トマト・インゲン豆・トウモロコシ→チチャ（口かみ酒）を食していた。天然の冷蔵倉庫コルカをつくり、食料品の他、毛布・羊毛・武器・金

属器・衣料・道具類をいれていた。

貨幣を使用せず、「アイリュ」と呼ばれる親族組織・共同体「アイニ」という相互扶助組織の中で暮らしていた。土地・鉱山・家畜などの生産手段は共同体に帰属する。土地は皇帝・太陽神・人民に分割し、皇帝・太陽神の土地は人民に労働を課し生産物を徴収して税とした。再配分で、寡婦・老人・孤児に支給し、飢饉の時には生産物が放出された。また、棚田の塩田テラスで作った塩をジャガイモと交換するなど、物々交換もあった。



インカ帝国の神話では、万物の創造主＝ピラコチャが太陽と月を創る。昼と夜に分けた。

太陽神は湖とも洞窟ともいわれるが、そこで、マンコ・カバックを誕生させ、インカ族の王とした。

また、ミイラ信仰も盛んで、王は死ぬとミイラにされ、生きていた時と同様の生活をさせられた。そのため、新しい王は宮殿を新しく作り、新しく財産を築くため、領土拡張の遠征を行った。

しかし、鉄は作れず、主な武器は投擲器や石付き投げ縄だったため、スペインによる侵略を容易にした。



ピラコチャ

タイ（イサーン）とラオスの旅

研究生 十河 和夫

1. 最悪の出発！ぼくは呪われているのか？

2017年の夏、タイのイサーン地方（タイ東北部）とラオスに旅行した。出発の直前、トラベルバッグが壊れた。何度試みても鍵は開かず、仕方がないので壊れたバッグを引きずって出発した。

搭乗手続きでバッグの鍵が壊れていることを伝え、鍵の上にテープを貼って終わり。そんな事だけでいいのかという心配を抱えながら飛行機に。それでもしっかりとワインを飲んでバンコクに到着。

バッグをどうかしなければと故障したバッグの鍵を触っていたら、空港職員が寄ってきた。怪しいと思われたのだろう。タイ語で話してくる。全くわからない。英語で言われたのかも知れないがわからないのは同じだ。必死になって、怪しい者ではないと説明。だが、向こうもこちらの言葉がわからないのだろう、しきりに無線で連絡をしている。

嗚呼！！ ヤバイ。軍隊がやってきて拘束されるのだろうか？ 必死になって怪しい者ではありません。バッグの中には怪しいものは入っていませんと説得に励むが、向こうはこちらの説明を無視して無線で連絡を取りあっている。始め悪ければ悪い事は続くのか！！！！！！

しかし、やってきたのは日本人。手には財布が！ 実は飛行機に財布を忘れていたのだった。そこにはクレジットカードが全て入っていた。これを無くしたら旅行は出来ない。係員はカバンの壊れた者を探せとでも連絡を受けたのだろう。

何が幸いするか解らない。本当に助かった。バンコクがいつべんに好きになった。タイの係員に、コップンカップ！ 地獄に仏。本当に拝むようにワイ（合掌してお辞儀をする）をした。財布を忘れて、しかも気がつかないなんて！！これから先の旅が思いやられる。

バンコクは天使の都と呼ばれている。しかし

バンコクはタイのイサーンと呼ばれる貧しい農村地方から出稼ぎに来ている人たちが住む都でもある。タイでは、唯一の都市であるバンコクと農村の経済格差が大きい。出稼ぎの人たちは低賃金で働かざるを得ない立場に追い込まれている。バンコクのタクシー運転手、歓楽街の女性の多くはイサーン出身者である。

今回は、その実態をフィールドワークするためイサーンを旅することにしたのだ（あくまでも目標です）。



呪いを解くためピーを祀る祠に。
周囲にはリングが奉られていた

2. タイの人は地獄好き？

そして、またしてもピーの呪いが！

イサーンの玄関口コラーットの「Wat phalokloi」を観光する。知る人は知り知らない人は知らない地獄寺として有名な寺だ。タイには地獄を見せてくれる寺が多いが、この寺は『HELL 地獄の歩き方』で紹介されていて、テーマパークとしても面白いと書いてあった。

それで行く気になったのだが、この寺を選択した時からタイからピー（悪霊）が派遣されたとしか思えないほど悪連続きである。カバンは壊れる、財布は落とす、激しい下痢に襲われる等々。

ホテルからトクトク（三輪タクシー）でバスターミナルに。運賃は80 バーツ。少し高いがホテル前にたむろしているトクトクである。妥当

な値段だろう。100 バーツを出すと「旦那お釣りがおまへん」との返答。「何（少し無言）」それに恐れをなしたか、ポケットから小銭をひねり出した。1 バーツ硬貨で8 バーツ。まあ仕方ないか。被害は少ない。

さて、ノンタイ行きに乗らねばと急ぐ。切符売り場で「ノンカイまで」「300 バーツです」「ムムムムいやに高すぎる」。確認のためにホテルの人にタイ語で書いてもらったメモを見せる。「旦那、ノンタイと書いてまっせ」。

ここで気がついた。ホテルの人から、ノンカイと間違えないようにと言われていたのだ。それが、何故かあえて間違えて口走っている。これはやばい。ピーがまだ取り憑いているにちがいない。運賃が高価なので気がついたが、乗っていたら北の果てのノンカイまで連れていかれる所だった。



世界的に有名な地獄寺？

さて、無事ノンタイに到着したのはいいが、降ろされたのは何もない所。家影もなく人もいない。田んぼの中を一本の道があるだけだ。バスの車掌はそこを歩いて行けという。これも試練か？ 仕方ないので歩き始める。世界的にも有名な地獄寺なのに車どころかバイクさえ走っていない。やっと耕運機を運転する人と出会う。

嫌な予感。ピーの仕業か。と考えた途端、腹がグルグルと痛み出した。バンコクで見舞われた下痢が完全に治っていなかったのか？ いや、これこそピーの仕業。負けるものか。いざとなったら田んぼの畦道に駆け込めば・。

日陰になるようなものが何もない道。腹の具合の悪さは耐えがたくなってきた。負けるもの

か。バンコクではそのために拝みまくってきたではないか。「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」「南無太子金剛」エトセトラ。うううううううううううううううううううううううう！ 門が見えた。あと少しだ。

売店の人に「スカーは何処ですか」何故か通じない。「トイレは」これも通じない。しかし、腹を抑えた必死の形相だったのか、あちらですと指を指してくれた。で、なんとか一難はさつたが、トイレは完全なタイ式で、紙など用意されていない。ここでうろたえては武士の沽券に関わる。タイ式トイレなど手動式ウォッシュレットと考えたらいいのだ。ちよろちよろと桶で水を流して手で洗う。合掌。

3. 冒険家とは成るものではなく、

成ってしまうものだった！

冒険とは、冒険家をする物である。例えば、インディジョーンズ。彼は密林や砂漠でも平気で出かける。しかし、一般人は違う。自分から冒険家になろうとは思っていないだろう。ぼくも、パーテム国立公園に行くまではそうだった。

先史時代人の描いた壁画が見られるパーテムに行くため車を前日に予約した。しかし、夕方から降り出した雨は夜中にはゲストハウスが流されると思うほどのすごいスコールに。これでは中止だろうと思ったが、運転手は当日の朝約束通りやって来た。

雨ですが大丈夫ですかとおずおずと聞くと、マイペンライと答えた。出た！ タイ人得意の必殺三段蹴りの威力を持つマイペンライ。このマイペンライを本当に大丈夫だと信じるとえらい目に会う。というのも園田学園女子大学図書館でマイペンライに関しての論文を読んだのだ。タイに進出した日本企業がこのマイペンライに悩まされて書いた論文だ。

そんなぼくの気持ちなどお構いなしに運転手はマイペンライ、マイペンライとドラえもん柄の子供の傘をぼくに突き出した。こんな傘で大丈夫なのか？ と質問する事さえ出来ない雰囲気だ。しぶしぶぼくは車に乗り込んだ。

パーテムは朝が早いということもあって、広い駐車場に車の影はない。公園案内所に行くと、係員は吃驚した表情を浮かべた。こんな日に来るかという感じだ。しかも、日本人が！



危険な棚道しかない

案内パネルを見た後、観光コースに沿って進む。まず、メコン川を見渡せる断崖の上に佇んだ。200mもある切り立った崖だ。立っているだけで足がすくむ。確かに雄大だ。と思っていると係員がやって来た。コースはこちらですと知らせに来たのだ。

わかっているわ、雄大だから眺めていただけじゃ。でも、係員には藤村操みたいに見えたのだろう。よほど顔が引きつっていたのだろうか。しかし、あとで思えば係員は中止を勧めようとやって来たに違いない。その時に気がつかなかったのは呪われていたせいかな？

階段もどきの道を降りていく。道は整備されているが岩を削っただけ。所々断崖にへばりつくようにつくられた道もあるが柵は無い。足を滑らせると、200m下に真逆さまに落下するような危険な箇所もある。しかも雨で滑りやすくなっているのはいっそう危険である。

雨は止んだが、断崖の上の方からは滝のように伏流水が落下してくる箇所がある。道が川になっている所もある。前にも後ろにも観光客の姿は無い。つまり孤独の戦いを強いられているのだ。

目標の断崖ようやく到着したが、描かれた壁画はしょぼく、ほとんど剥がれて判別不能。こんな壁画を見るために冒険をしなければなら

ないのか。虚脱感が襲う。

この時、案内所に書いてあった事を思い出した。「駐車場から1時間近くあり、女性は注意する必要があります」その時は、気にもかけなかった表現だったが、重要なコメントだったのだと気がついた。

つまり、女性だけでなく誰もが危険なコースだったのだ。これが、危険・注意と大書きで書いてあったらもっと慎重になったはずだが、女性という言葉に油断があった。でも、もう後戻りは出来ない。行くも地獄、戻るも地獄の世界に踏み込んだのだ。まだ先にはこのような壁画が3箇所ある。見たくもないが。進むしか仕方ない。

大百足、光沢のある大蝶々など日本では見かけない昆虫の出迎えを受けつつ、滝のような汗をかきつつ慎重に進んだ。最後の壁画は、これまでとは比べようもないほど危険な箇所にあった。右は絶壁、左は谷底。そこに50cmもない柵のような道。道を塞ぐように大岩が張り出している。

つまり腰をかがめ少し谷側に体を反らして進むという、まるでアクロバットをするような道だ。行くか戻るか少し考えた。正常人なら戻るのを選択するはずだ。普通でも危険なのに雨で道は滑りやすくなっている。

映画ではクライマックス。臨場感を出す音楽が鳴り響く。ぼくとしたらマイルス・デヴィスのトランペットをクールに鳴らして欲しい。男は慎重に進む。が、道はせり出した岩場で徐々に狭くなって雨でツルツルと滑りやすくなっている。じりじりと進む男。

その時、トランペットが高音でビーパップする。死刑台のエレベータだ。男の足が少し滑るのを映し出し、谷底を見せる。ああ、どうなるかドキドキだ。トランペットは響く…。

しかし、まあ、何とかなるものでこれまで以上に酷い壁画を観て無事公園事務所にたどり着いた。その時だ、若い男女の4名のグループがやって来た。2時間冒険した間、誰も見学者は無かったのだろう。広い広い駐車場に僕がチャ

一ターした車と彼らが乗ってきた車だけがあった。彼らもこの冒険を試みるのか。興味があったが、ぼくの車の運転手は無情にも早々に発車した。

4. 自転車に鍵を掛けないのが当たり前の社会

イサーンのコーン・チアムのゲストハウスで自転車を借りた。古びた自転車だ。でも鍵をかけないと日本では直ぐに盗まれてしまう程度に新しい自転車だ。店の人に「鍵が無い」と言うと、「鍵なんて必要おまへん」という答えが返ってきた。「でも、盗難が心配ですが」「旦那、大丈夫でやんす。乗って行っておくんなはれ」という回答。



村を守る仏様

あれ、このような話どこかで聞いたな。たしか、北のはてチェンセーンだったな。あの時も「旦那。鍵は必要ござんせん。こちとら鍵をかけるなどという野暮なことはしておりませぬ」と言われた。ということは、タイの田舎では自転車泥棒がないということか！ 何かわからへんが、田舎では自転車に鍵がいらんらしい。

そういえば、俺んちの田舎の村も家に鍵など掛けなかった記憶がある。それが、いつの間にか二つも三つも掛けるようになった。あれはいつからだろう。高度成長時代に入った頃からだろうか？ 鍵のいらぬ社会が懐かしいな。だけ

んど、イタリア人なら映画になれへんがと思うだろうな。

5. さいごに

呪われたタイからラオスに入国したが、ピーの呪いは続いていてボラれたりウロウロ連れ回されたりした。だが、コーン島のゲストハウスに無事たどり着くことが出来たということは呪いは解けたのだろう。

コーン島とデー島を結ぶ旧鉄道橋のすぐ側にゲストハウスはある。ぼくは、朝、昼、夜とゲストハウスのレストランからその橋を見つめていた。

というのも、この村にはコンビニはもちろんビヤバーも無い。何もすることが無いのでぼーとしているしかないのだ。ぼくはここで昼寝の楽しみを知った。昼寝とは時間が余っている人しかできない贅沢な楽しみだったのだ。

朝、橋を眺めながら朝食。その後は、ビールをちびちび飲みながら読書。目が疲れたら橋を眺める。昼、橋を眺めながら昼飯、食後のコーヒを飲んで昼寝。夕方からビールを飲みながら橋を眺め、暗くなったら夕食を食べる。橋の下をメコン川が流れて行く。



いろんな物が橋を渡る

方丈記の冒頭が浮かんでくる『行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし』。橋も多くの人や車や動物が渡って行く。あたかも彼岸と此岸を渡るように。

大阪松竹座新築開場二十周年記念

三喬改メ「七代目笑福亭松喬」襲名披露公演 落語鑑賞記

情報学科3年 岡田 真人

私はどちらかというと江戸落語の噺家さんが最頁で、上品で気風の良い古今亭志ん朝の芸風が好みに合っています。しかし、同じ西宮市在住ということもあり、上方落語の三喬さんは比較的良く聴きにいており、そういうご縁もあって、十月八日快晴の日に、三喬改メ「七代目笑福亭松喬」襲名披露公演に足を運びました。



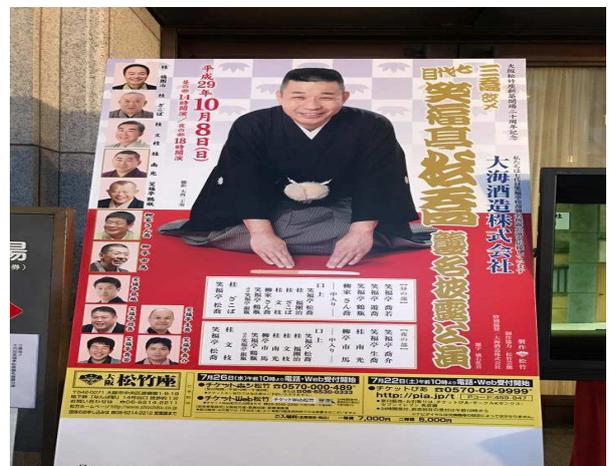
▲御堂筋側から見た大阪松竹座

柳亭 市馬

笑福亭 鶴瓶

司会：笑福亭 銀瓶

※口上とは、舞台上に先輩落語家たちが勢ぞろいして、お客さまに七代目笑福亭松喬の最頁と鞭撻をお願いする席のこと



▲三喬改メ七代目笑福亭松喬襲名披露公演の立て看板

出演者と演目は以下のとおりです。

- | | |
|--------|------|
| 笑福亭喬介 | 犬の目 |
| 笑福亭生喬 | 豊竹屋 |
| 桂南光 | 阿弥陀池 |
| 柳亭市馬 | 片棒 |
| 〔仲入り〕 | |
| 口上※ | |
| 笑福亭 松喬 | |
| 桂 福團治 | |
| 桂 文枝 | |
| 桂 南光 | |

桂文枝 優しい言葉

笑福亭松喬 三十石



▲チケットは売り出し早々に完売

今回は口上の席での先輩落語家諸氏の松喬さんへの励ましの言葉が面白かったです。たとえば結婚式などの祝辞は美辞麗句のオンパレードですが、そこはさすが落語家さん。辛口あり、一捻りあり、脱線ありと、場内大爆笑。



▲ロビーにはご轟眞筋から贈られた「祝い幕」が

出演者の演目は、文枝師匠の新作落語をのぞいてはいわゆる古典落語でしたが、こういう言い方をすると語弊がありますが、口上での個々の落語家さんのご挨拶が私的にはいちばんウケました。

とはいうものの、三喬さんにとっては師匠の名跡を継ぎ、その名を自分の代でもっと大きくしてゆく責任があり、襲名披露公演はまさしくそのスタート地点でありますから、選んだ演目は上方落語の大ネタ「三十石(さんじっこく)」。

これは師匠の師匠六代目松鶴の得意ネタでもあります。

この噺は京と大坂を結ぶ三十石舟の船上をおもな舞台とする上方落語の演目の一つで、主人公二人が京からの帰途、伏見街道を下り、寺田屋(司馬遼太郎の『竜馬がゆく』で再々登場するあの船宿)の浜から夜舟に乗り、天満橋・八軒家浜へ帰り着くまでを描く。



▲襲名披露公演のプログラム

トリで松喬さんが高座に上がるとお客は大拍手と大歓声で迎えます。噺のマクラは短めで、船中の主人公二人の軽妙な会話をじっくりと。古典落語に力を注ぐ実力派として定評のある人ならではの話芸が気持ちよく、聴く人の心に広がってゆきます。約40分の熱演で本日の襲名披露はめでたくお開きとなりました。



▲七代目松喬襲名の新聞記事



▲終演後は松喬さん自らロビーでお客さまをお見送り

50年前の旅の記憶

研究生 橋本 秀明

9月21日(木)～9月22日(金)に国際文化学科2年生の、松山先生を囲む会(ファンクラブ?)が企画した「松山利夫先生と行く出雲巡りの旅」に参加した。50年前、一人で旅した記憶がよみがえってきたからである。今回の旅の詳細は、国際文化学科2年生が掲載されるので、ここでは主に50年前の旅の思い出を記しておきたい。4泊5日の旅だと憶っているが、定かでない。

初日は大阪を出て、鳥取県の関金温泉から歩いて20分のところにある倉吉市志津藤井谷の母の里に宿泊(伯父の住まい)。伯父には事前連絡せず叱られた。

2日目に松江に向かい、バスで八重垣神社、歩いて神魂神社、バスで松江城と観て回り、市内の旅館に飛び込み宿泊。八重垣神社の主祭神は素盞鳴尊・櫛稲田姫。『古事記』に出てくる「八雲立つ出雲八重垣妻込みに八重垣造る其の八重垣を」の有名な和歌は素盞鳴尊が詠んだとされている。現在は、縁結びの神だということで若い人々が来られるようである。鏡の池で縁占い(1回100円)を楽しんでいるとか。以前TVで池の映像を観ていると柵できれいに囲まれていた。筆者の記憶では柵など無く、境内は人も無く静かなものだった。そこから歩いて神魂(かもす)神社へ。途中田植え(5月)をしていた農家のかたに教をを請い神社に向かう。当時は訪れる人も殆どないような神社であったが、現在は国宝に指定されている。本殿が現存する日本最古の大社造りのためだと想う。一見の価値はあるので是非。

松江城の印象は変わらず。天守閣の階段が急なこと。城内で着物を着たモデルの写真撮影会をしていたのが妙に記憶の片隅に。

3日目、一畑電気鉄道(現一畑電車)で松江から出雲大社に向かい、のちバスで日御碕灯台。帰路は大社線経由(現在廃線)で母の里にて宿泊。出雲大社は現在のようにきれいではなかつ

たと記憶している。一つのエピソードをここで紹介。大社内をぶらぶらしていると着物・袴をつけた中年の男性が来て、頼んだわけでもないのに勝手にあちこちの場所を案内する。終わってから案内料を請求され、まあいいかと500円を差し出す。今はボランティアで無料案内だと思うが。日御碕は灯台の階段を上った記憶がすすかある程度。

4日目は、従弟の案内で鳥取砂丘へ。天気が悪く、早く退散。倉吉市の打吹(うちぶき)公園で遊ぶ。ツツジが咲いていたように憶う。

5日目に帰路につく。伯父から沢山の土産を持たされ、勤めている母に電話して大阪駅に迎えに来てもらったことを鮮明に憶えている。

ここで、関金温泉に至る行程を記す。現在は山陰本線の倉吉駅からバスを使つての移動となる。当時、倉吉駅(元は上井・昭和47改定)から倉吉線という支線があり終点山守駅。打吹駅(元は倉吉・昭和47改定)を経て関金駅へ。温泉は近くに(国民宿舎有り)。倉吉線は昭和60年に廃線、今は廃線ウォークに利用されていて、全国でも珍しく線路がそのまま残されている。



松江城



車窓(バス)から眺めた宍道湖の夕景

歴史の道「中国街道」を往く

情報学科3年 藤原 多計治

1. はじめに

歴史好きな人達に注目されている一つに、健康作りを兼ねた「旧街道の散策」がある。街道を歩くと歴史の面影と対面でき、そして往時の姿を偲ばせる。

園田学園が位置する尼崎市域の旧街道は、京都と西国を結ぶ有名な西国街道、尼崎の神崎と伊丹郷を経て有馬温泉とを結ぶ有馬街道、そして大阪と西宮を結ぶ中国街道がある。

2. 中国街道

中国街道は、大阪と西国を結ぶ街道で大阪より尼崎を経て西宮に至り、ここで西国街道に合流する。

西国街道は、平安遷都以降重要な位置付けをされ整備された街道である。それに対して中国街道は、いつからあったかは明確ではなく、中世以降海沿いの集落を結ぶ交通路から起こったようである。大阪が天下の台所として、尼崎が城下町として発展するに伴い利用度が高まり整備されている。

尼崎市域の初期は、神崎から西行し園田、塚口を通り守部（もりべ）付近で武庫川を渡り、西宮市の津門（つと）を経て西宮に入ったので、津門之中道（つとのなかみち）と呼ばれたコースである。近世に尼崎に城が築城され、城下町が整備されると利用度が高い城下町を迂回するコースとなる。旅人、そして参勤交代の大名行列ばかりでなく享保14年（1729年）4月には八代将軍 吉宗の献上品である「御用の像」も通っている。

3. 中国街道を歩く

暑さが残る初秋に、一日がかりで尼崎市域の中国街道、約8.6kmを旅した。始まりは、神崎川に身を投げた遊女5人の菩提を弔うため建立された「遊女塚」から出発。付近には神崎の渡し跡である金毘羅さんの石燈籠がある。この地を西にしばらく歩くと、素盛鳴（すさのお）神社があり、このあたりは今もわずかに神崎宿

場の面影が残る。中国街道と有馬道の分岐点を示す道標を兼ねた地蔵さんがひっそりと鎮座する。

街道を南に歩き、市営西川団地南東を西に折れ極楽湯尼崎店を通り、市営常光寺団地を経て県立尼崎工業高校へと細い街道を歩く。

稲仏寺近くの古い家並みが続く商店街新町通りとなる。さらに南下すれば大物公園であるが近くに「残念さんの墓」がある。大物で捕らえられ自決した長州藩士の山本文之助の墓であるが、死に際に「残念、残念」と叫んだとされる。さらに南下し、阪神大物駅高架を通り、庄下川御茶屋橋の手前を西に折れ戎橋となる。ここで昼を過ぎたので昼食、休憩をとり疲労した足を休める。

足も回復したので街道にもどり、尼崎城下町の中心街路であった43号線側道を歩く。

尼崎城主の祈願所になっていた貴布祢神社の鳥居を右折し、阪神本線をこえ北進約200mで写真に示す道標がある。



中国街道に立つ道標

道標の表示に従い左折し、琴浦神社に至る。神社前の琴浦通りには、中国街道の解説板案内表示があり歴史街道をアピールしている。さらに西に歩き終点の武庫川橋となるが、さすがに疲れた旅であった。

参考文献：木村 万亀子「中国街道の踏査」

『地域史研究』12巻 2号

韓流時代劇が面白い

研究生 樽井 敏彦

若い頃から仕事を辞めた後は、私の好きな読書三昧の生活が待っていると楽しみにしていた。実際にその時を迎えるとほとんど小説などは読まなくなった。本を読み始めると細かい字が読みにくいし、根気がなくなりすぐに疲れてしまう。やはり少々無理をしてでも、若い頃にもっといろんな書物に馴染んでおけば良かったと後悔するが、後の祭りである。

その代わりにテレビを見る時間が増えた。野球やサッカーなどのスポーツは、ライブでないと興ざめになるのでよく見るが、他では韓流ドラマが面白い。と言っても、私が興味を持つのは韓流時代劇である。

BS放送の番組表に韓流ドラマが登場してから、今では放映しない日がないくらい定着してきた。最近では民放でも韓流ドラマに時々お目にかかれるほどだ。

私は会社生活をリタイアした頃から韓流ドラマを見始めた。最初の頃は分野を問わずに見ていたが、最近放映される現代劇は、ほとんどが出生の秘密、記憶喪失、壮絶な復讐、身内の骨肉の争いなどに絡んだ話ばかりでありあまり見なくなった。

しかし、時代劇は面白い内容のものが多く、現在も数本のドラマを毎日欠かさず見続けている。韓流時代劇と言えば、皆さんの中にも「宮廷女官チャングムの誓い」をご覧になった方もおられるだろう。主人公チャングムが、宮廷料理人の頂点である最高尚宮(チェゴサングン)を目指すも、後に王の主治医となる波乱万丈なサクセスストーリーである。

私はその作品を手掛けた韓国時代劇の巨匠と呼ばれるイ・ビョンフン監督のドラマが、特に気に入る。最近のドラマでは「イサン」や「トンイ」などが好評であり、今年は「オクニョ運命の女」がNHKのBSプレミアムで放映

されている。

彼が演出するドラマは、実在した人物を主人公にしたものが多いが、あくまでフィクションである。彼は実在した人物に架空の人物を絡ませ、膨大な脚色を加えて奇抜でかつ娯楽性に富んだドラマに仕立て上げていく。

「実在であれ架空であれ登場人物を面白く動かし、今を生きる私たちに向け、夢と希望を語らせるのが私の仕事だ」。

彼はテレビのインタビューでそう答えた。彼のドラマ作りに賭ける信念や意気込みが伝わってくる。

聞くとところによると、韓国ではドラマは週に2話放映されるものが多いという。そうすると長編ものが増えるが、彼が手掛けるドラマのほとんどは、完結するまでに50話以上に及ぶものばかりである。そのため物語がゆっくり進んでいくと思われるが、実際はそうでもない。

これだけの長いドラマになると見終わるまでに相当の期間がかかる。毎回、見る人たちを惹きつけておくには原作や脚本がどれだけしっかり書かれているかが鍵となる。一回の放送毎に、いくつかの見せ場を設けて、次回に期待を持たせて終わるような工夫をしないとすぐに視聴者から飽きられてしまう。彼はそういう演出が得意なプロの仕事人である。

彼の作品以外では、人気のあった「朱蒙」も面白かったが、朝鮮王朝(李氏)の創世記を舞台に王朝が成り立った経過をなるべく史実に基づき忠実に描いた「龍の涙」という歴史ドラマが見ごたえがあった。169話に及ぶ超長編であるが、単純な権力闘争だけではなく、その時代に翻弄されながらも結果的にはそうせざるを得なかった登場人物たちの心理的な側面を深く掘り下げて描くことで重厚なドラマとなっている。

いずれにしても軟派、硬派を問わず韓流時代劇はとても面白い。それに韓国の歴史を少しは知ることができるとあってますます興味が湧いてくる。

園田学園女子大学シニア専修コース

クラブ紹介

けやきコーラス部

研究生 橋本 秀明

シニア専修コースが設立されたのち、2年目に入学した受講生が部を起こしたと聞いています。部員も入れ替わり当初から残っているのは1名。歌唱指導田井先生、ピアノ山岸先生(3代目)、部員7名(男性2・女性5)の少人数。コーラスの灯を消さないため、また先生も辞めたくないとの思いで練習に励んでいます。

練習は、月3～4回、金曜日の4時限の時間帯です。ユニゾン・混成二部・三部・四部合唱で、童謡・唱歌・歌曲・歌謡曲・洋楽など様々な歌をうたいます。最近ではAKBの歌も。練習の成果は、シニア専修コースの入学式・卒業式、そして秋のけやき祭(学園祭)で披露します。

公開講座「楽しいコーラス」の先生は、一声を出すことは、精神的にとってもよいことです。お腹から精一杯声を出すことは健康にもつながります。うたう楽しさはいうまでもないですが、皆でうたえば、もっと楽しいものです—とっておられます。譜面が読めなくとも歌はうたえます。多くのかたにコーラスの楽しさを知ってもらいたいものです。



2016年けやき祭

けやきテニス同好会

国際文化学科3年 眞鍋 幸裕

シニア専修コースでは唯一のスポーツクラブであり、現在メンバーは17名(男子8名、女子9名)です。

練習は毎週木曜日12時30分から14時30分で、コートは園田学園のオムニコートとクレールコート各1面を使わせて頂いています。

オムニコートとは、砂入人工芝で排水性が良く足に優しいコートです。

練習はシニアらしく決して激しくはありません。テニスを楽しみながら、体力を維持し、学園生活をエンジョイすることを目的とし、ウィンブルドン観戦を目指します。

毎回練習後は、学食又はカウボーイで反省会を行います。

皆様テニスで良い汗をかき、青春の気分になりませんか。参加をお待ちしています。

園田学園は伊達公子さんを輩出したテニス界の名門校であり、先日も関西学生選手権大会があり、大阪の靱テニスセンターに応援に行きました。(園田学園女子大学はダブルスで準優勝)こんな名門のコートでテニスができるのは幸せです。



けやきITを楽しむ会

研究生 山本 太
 研究生 中村 米三郎

けやきITを楽しむ会には、VBAコース、パソコンコース及びスマホ・タブレット勉強会の3コースがあります。

1. VBAコース

Excel VBAを使って、論理（ロジック）を必要とするプログラムの作成を行います。ソフトウェアを理解し、プログラミングすることの楽しさを実感することを目的とします。



2. パソコンコース

パソコンに必要な機能、楽しい機能、便利な機能を勉強します。去年は、「クリスマスカード」を作成しました。また、子供用プログラム言語「Scratch」を使って、プログラミングを行い、楽しいプログラムを作成します。



3. スマホ・タブレット勉強会

会員が持っているスマホ・タブレットの操作方法や実際に使用しているアプリの使い方をお互いに交換、教えあって操作レベルを高めること、また、会員が得たスマホ・タブレットの最新情報、知識をお互いに交換しあって、効率よくスマホ・タブレットを使用することを目的とします。



けやき遊歩クラブ

文学歴史学科2年 宮岡 憲次郎

昨年入学と同時にこのクラブに入った。月1回の例会は実に楽しく充実している。このクラブのすばらしさを挙げると、

1. 企画内容がバラエティに富み、

メニューが豊かなことだ。

近郊の名所旧跡・神社仏閣を訪ねるのは勿論、BBQをやったり、芋ほりや枝豆の収穫をしたり、青春18きっぷを使った旅やバスツアーもある。常に何か趣向が凝らしてあり、一工夫されている。また訪問地の名物料理にも舌鼓を打つ。

2. いろんな出会いがあり、

新しい人間関係が結べる。

歩きながら、鑑賞しながら、食事をしながらいろんな人との交流が生まれる。学年・学科・年齢を超え、参加するたびに仲間が増えていく。気さくでフレンドリーな人ばかりで、私もこの1年でたくさんの人と知り合いになった。

3. 健康に良く、頭と体を鍛えてくれる。

毎回丁寧に下調べされた写真入りの解説冊子付で、その辺の安直なガイドブック等問題にならない。その資料を見るだけでも面白く勉強になり、企画を2度楽しませてくれる。

現在部員数は109名に上る。10月は伊吹山・関ヶ原へバスで行った。11月は紅葉の鞍馬・貴船が待っている。春は須磨の梅・醍醐の桜、秋は飛鳥の彼岸花と四季折々の風景に触れながら、自然の豊かさの中で毎回満喫している。



関ヶ原 徳川家康 最期陣跡にて

**おしゃべり自由
けやきカラオケクラブ**

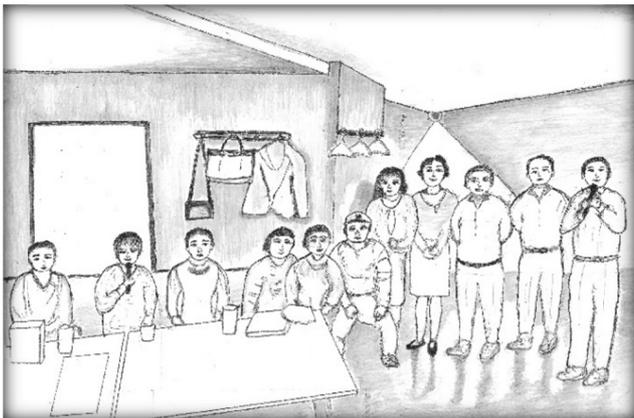
研究生 木下 俊造

クラブは設立から4年で、500曲の歌唱と延べ300名の参加があり、おしゃべり自由、出入り自由、出欠自由と、荷物ゼロのゆるい雰囲気をモットーに活動してきました。

受講曜日の関係もあり、メンバー全員の同時出席は至難の業ですが、月・水・金のどれかで、2か月3回程度のペースで例会を実施しています。ふだんは大学の近くに15名以上座れる部屋を確保していますが、時には二つの部屋で、それぞれ異なった楽しみ方をしています。

1月は開花亭でのシニアライブに参加、7月は歌での47都道府県制覇も達成、9月10月は園田シニア関係者から、広くリクエスト曲を募る新企画を実施し、第11回と12回例会ではリクエスト曲にチャレンジしますので、メンバーだけでなく関心のある方にも楽しんでいただければ幸いです。

例会はほぼワンコインで2～3時間程度は楽しんでいただけますし、少しの時間でも参加していただければ、今までと違った世界が広がるはずです。



例会イメージ

今回は適当な写真が見当たりませんでしたので、例会の様子をイメージで紹介いたします。

軽音楽同好会 バンド名「GAKU-YOU」

研究生 木村 勲

昨年4月正式クラブとしてバンド結成

現在、ボーカル、ギター、ドラムの5名で構成し、1950年代～60年代のオールディズ、60年代～70年代のフォークソングやポップスなど青春時代に親しんだ楽曲を選曲し、毎週金曜日午後からバンド練習を行っています。

演奏活動の実績

学内では学園祭（けやき祭）、シニア合同イベント、七夕祭りに出演、学外では自主企画でライブハウスで演奏会を開催し、夏休み期間中にも関わらず多くのシニア生にご来場いただきました。

10月8日（日）園田学園女子大学内「地域連携推進機構」事務局経由「つなガール」の紹介で「猪名川・藻川水辺まつり」でも演奏させていただきました。



8/25 伊丹ライブハウスにて



藻川水辺まつりで屋外演奏

音楽を通じて交流を目指す

今後は、学内・学外を問わずコミュニティが出来る企画を提案し、シニア活性化の一助となれればと考えております。

練習日と場所

現在、メンバーは募集していませんが練習風景をご覧になりたい方、飛び入りで参加したい方は大歓迎です。

練習日・場所等の詳細については生涯学習センターでご確認ください。

けやき朗読倶楽部

研究生 金森 扶美子

けやき朗読倶楽部は、この7月に立ち上げたばかりの、でき立てホヤホヤの会です。

以前から、「朗読クラブがあればいいね」と言っていたのですが、今年になって具体的に話が進むとは思っていませんでした。それなのに前期授業も終わろうとしている時に、あれよあれよという間に10名の方が集まってくださり、発足しました。しかも10月の『けやき祭』の発表会に出演する条件付きでした。

でも、その後夏休みに入り、次に集まったのが9月25日、ロコミで15名に膨らんでいて、嬉しい限りでした。早速『けやき祭』に向けての出し物を決め、まずは部員の親睦をはかるには、食べるのが一番！と「お好み焼き」で旗揚げ。

皆さんなかなか忙しくて、一同に練習できたのは10月中旬。2～3名を除いてほとんど朗読が初めてなのに、『けやき祭』でマイクを使って朗読デビューするという幸運！それなりに楽しめたと思うけれど、台風のために2日目の公演が中止になったのはいかにも残念でした。

けやき朗読倶楽部では、いまさらプロのアナウンサーを目指すわけではないので、標準語アクセントはある程度にして、表現の技術を覚え、個性を大事に、人前で本を読むことで度胸をつけ、自己解放して“心に届く、伝わる、そして自分も楽しむ朗読”を心掛けたいと思います。

将来は小学校やホームでのボランティアや朗読劇などを楽しめればよいなと考えています。



「けやき便り」編集クラブ

国際文化学科3年 櫻井 秀也

「けやき便り」は平成22年の10月に創刊特別号を発刊したのが始まりで、今回で17号となりました。

「けやき便り」は、シニアコースの皆さんの「声」そのものです。皆さんが普段感じ、考えていること、毎日の生活のひとこま、そして趣味や学内行事などの経験をとおして伝えたいことなどを素直に書いていただいています。

そうした身近な「声」をお届けすることで、仲間の皆さんの共感をよび、刺激となり、なにより学園生活を楽しんでいただける情報誌になれるのではと思っています。

私たちクラブ員はその一助になればと願っています。こんなことなど思わずに、作文、川柳、写真、何でも結構ですので、投稿をお寄せください。心よりお待ちしております。

編集クラブの活動ですが、春と秋の年二回の発刊に合わせて、企画、原稿募集、編集・校正、印刷、製本といった作業をクラブ員（現在17名）全員で行います。活動は、毎月ほぼ一回。

編集会議中は、冗談も交えた活発な意見が飛びかいます。そして編集会議を終えると、「たこ焼き屋」へ直行して乾杯、ワイワイガヤガヤ。

書くことや編集が好きな方はもちろん、授業だけでは物足りない方、お話ししたい方、たこ焼きが好きな方、いつでもどなたでも編集部員に声をおかけください。そしてクラブ活動を一緒に楽しみましょう。



編集会議

総合生涯学習センターからのお知らせ

1 けやき祭参加報告

昨年度に引き続き、総合生涯学習センター「時代屋」を出店しました。今回は、クラブ同好会の皆さんと一緒に開花亭に展示ブースを設け、本学生涯学習・シニア専修コースのPRを行いました。二日目のプログラムは台風の影響で中止になり本当に残念でした。ステージを楽しみにしておられた方もきっと大勢おられたかと思います。これに懲りず是非来年のけやき祭も参加しましょうねとお声掛けしていたところ、近々そのキャンセルになったステージの開催を年内に計画しているとか！

センター前掲示板、要チェックです。



2 平成30年度入学生募集開始

11月27日(月)より、入学希望者の面談・授業見学を実施します。募集リーフレットが完成しておりますので、ご友人で関心のおありの方がおられましたら是非一部お持ち帰りいただきご紹介ください。また、11月末から2月の期間、入学希望の方へ一部授業を見学・体験用に開放いたします。よろしくご理解、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

3 後期シニア・ミーティング開催

今年度後期ミーティングは平成30年1月中に開催いたします。詳細は後日センター前掲示板で、また、各学科学年の代表の方へはメール等で詳細をお知らせいたします。ご興味ご関心のある方も出席ください。

4 今後の予定

平成30年	
1月12日(金)～ 2月28日(水)迄に	研究生新規登録・ 継続手続き
1月20日(土) 10:40～12:10	公開講座「人間を考 える」シニア研究生 講師
2月中	特別講座開催
3月9日(金) 13:00～14:00	平成29年度 卒業式
4月12日(木) 13:00～14:30	平成30年度 入学式
4月12日(木)～27日(金)	ハンドブック・時間 割配布/履修登録
4月16日(月)	平成30年度 授業開始

注意 平成30年度の「学内レントゲン受検」は授業開始後の4月末以降に実施いたします。(現在日程調整中)「他機関でレントゲン受検の方」は、平成30年1月以降に受検した健康診断証明書(胸部X線検査)が有効になります。ご注意ください。

5 さいごに・・・

本学公開講座・看板講座である「人間を考える」の平成30年度のテーマが、「夢の諸相」に決定。現在、学内外からの講師の手配準備を進めているところですが、同様にシニア専修コースからも「夢」を語っていただける研究生お二人を募集しています。自薦他薦問いませんのでお願いします。

最後に、センタースタッフの夢を「来年度に限定」し、ご紹介します。

木村(所長) : 「少年よ大志を抱け！」が生涯の夢です
 大野(課長) : マラソン・サブ4まで心身を戻す
 占野 : 松潤と握手をする
 増田 : オーロラを見に行くこと。+犬ぞり体験も！
 與山 : 色んな場所へ出掛けて、美しい写真を撮る！

☺ いつでもお気軽に！

総合生涯学習センターまでお越しください ☺

情報誌への投稿のお願い

当編集クラブでは皆さんからの投稿や情報提供をお待ちしています。内容については、たとえば次のような事柄で、写真やイラストなどを含めて頂いても結構です。

- ◆各クラスや学科コース便り
特別授業や行事、各種の活動報告や紹介
- ◆クラブ便り
クラブ紹介、クラブ行事や活動の報告
- ◆自由投稿
旅行記、ボランティア活動、趣味、個人の研究、テーマなどの紹介
- ◆読者の広場
「読者の広場」は、皆様方のいろんな作品などを掲載させていただくコーナーです。たとえば俳句・短歌・川柳・絵・書・イラスト・クラブ新設呼びかけなど

投稿は2号館1階の総合生涯学習センターにある研究生ファイル横の「けやき便り」編集クラブファイルに入れていただくか、下段の連絡先のメールアドレスに文書を添付して送付ください。

尚、投稿された原稿は、誌面の都合により変更・修正する場合や編集会議の審議により掲載できない場合（宗教・政治に関するものや公序良俗に反するものなど）がありますのでご了承ください。

◎「園田シニア人間探究」への応募

園田シニアの学生で興味深い人生経験をされた方や面白い趣味などに取り組みられている方をシリーズで紹介しています。この企画のインタビューに応じていただける方を募集しています。自薦他薦を問わず、多くの方のご紹介をお願いいたします。

<連絡先>

国際文化学科3年 櫻井 秀也
携 帯 : 090-6904-9738
E メール : hideyasakurai94@gmail.com

編集後記

★ シニア専修コースの生活によりやく慣れて、2年目を迎えました。さらに新しい世界を体験したいとの思いで入部しました。

「編集」についてよく分かっていませんが、諸先輩の方々にご指導を受けながら、私なりの情報発信をしていけたらと思っています。どうぞよろしくお願いします。 (S. M)

★ 編集部員が集まって準備を始めた時はあんなに暑かったのに、あっという間にもう晩秋の日々。今回も何とか「けやき便り」を皆さんにお届けすることができました。

本号では巻頭に山本名誉教授からお言葉をいただきました。「以前は情報を発信したくてもその方法を持たなかった。今は少しの技術を習得すれば誰でも情報の発信者になることができ、それが情報社会を健全な社会にするために大切だ」とおっしゃっています。

「誰でもが発信者に」のお言葉に、とても大切な意味が込められているように感じ、背中を押される気がしました。

皆さんからの「けやき便り」への発信もお待ちしております。 (H. S)

★ 今号も多様な記事が集まり、編集作業は楽しいものでした。巻頭に、山本名誉教授から文章と共に写真もいただきました。「けやき祭」と「七夕まつり」の記事では、当日の様子とシニアの皆さんの活躍を紹介できました。リトルワールドと、『出雲国風土記』の地を巡る研修バスツアー報告がありました。これらの記事は、履修科目をもとにした、学びの広がりや深まりを目指す取り組みとして紹介できました。

学科や学年を越える自主的な活動も紹介できました。投稿記事は多彩で、固定の読者がおられると伺っています。「にんげん探求 山に魅せられて50年」を担当しましたが、個人の顔が見える記事を今後も追求したいと思っています。 (K・K)